

2025 年 10 月 26 日（日）第二礼拝「ふたたびカデシュ・バルネア」申命記 1 章 1～3 節

今日は、日本宣教 39 周年記念礼拝です。神様がここまで守り導いてくださったことを感謝します。イスラエルの民は三十九年荒野で過ごした後、カデシュ・バルネアに戻りました。

第一番目、ふたたびカデシュ・バルネアに戻った理由です。イスラエルの民が出エジプトした後、ペンテコステの日にシナイ山で神様から十戒を頂き、幕屋も啓示されました。その一年後、幕屋が完成し、イスラエルの民はカデシュ・バルネアに着きました。そして、モーセは偵察者をヘブロン（約束の地）に送り、その地を探らせました。その十二人の偵察者のうちヨシュアとカレブは、その地が占領できると伝え、良い報告をしました。残りの十人はその地にいたネフィリム人（巨人）を恐れ、自分たちがいなごのようだったと否定的な報告をし、神様を侮りました。この出来事から、イスラエルの民は四十年、荒野で生活することになり、その三十九年目に、彼らはふたたびカデシュ・バルネアに戻ることになりました。

第二番目、荒野は自我が死ぬ場所です。人間は本能的に自分が一番偉いと思い、傲慢です。その人間の自我を無くす所が荒野です。荒野には道がなく、昼は暑く、また夜は寒いです。さそりや蛇もいて、いのちを失う危険もあります。ただ神様に頼るしか生きる方法がありません。この荒野を通して、人は謙遜になるのです。「…それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らなかったマナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということをおあなたにわからせるためであった。」（申命記 8：2～3）モーセはエジプトの王子として最初の四十年を過ごした後、ミディアンの荒野で四十年、羊飼いをしました。その経験を通して、モーセの自我は砕かれたのです。モーセが八十歳の時、神様は彼を用いてくださいました。荒野はヘブライ語でミディバル（御言葉の実）と言い、「荒野で御言葉が出る」という意味です。イスラエルの民もエジプトから救い出され、ミディアンの荒野で四十年間訓練され、自我に死に、主の御言葉に従うことの大切さを知りました。神様はイスラエルの民を背負われ、荒野の生活を守られたので、四十年間、彼らの着物は擦り切れず、足も腫れませんでした。どのような環境であれ、主の御言葉に従う時、主が守ってくださるのです。

第三番目、カデシュ・バルネアです。私たちは、三十九年目にカデシュ・バルネアに来たイスラエルの民のようです。カデシュ・バルネアは乳と蜜が流れる地、その入口であり、カトーシュ（聖なる）という意味です。私たちは永遠の天国という乳と蜜の流れる地に向かっていますが、ヨシュアとカレブのように御言葉を握り、進むことが大切です。イエス様は水と血（御言葉と血潮）によって来られました。それを証されるのが聖霊様です。ヨシュアとカレブは、このイエス様と聖霊様を意味します。彼らがカデシュ・バルネアでカナンの地を必ず占領できると告白したように、私たちも自分の思いに死に、イエス様の御言葉と血潮に頼り、聖霊様の助けを受けて、天国を勝ち取ることができると信じ、宣言しましょう。アーメン！